
・・・調子に乗って暴走したから見ないで！

・・・暴走したのを恥ずいけど貼る

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- ・・・調子に乗つて暴走したから見ないで！

〔ZΠ-〕

N
2
1
3
5
M

【作者名】

- ・・・暴走したのを恥ずいけど貼る

【おひさま】

金髪ロリヤンデレツ娘と一緒にデート。

すみませんただ自分の趣味詰め込んで暴走しただけです。

プロローグ（前書き）

何となく作ってみた。

読まない方が良いかもしません。

一応これ、後付ですから。

真相忘れないためのメモ的なものですがね。

ラストに読んだ方が・・・

その前にラスト作んなきや。

プロローグ

くらべよ

いたいよ

おかあさん

ごめんね

わるいじじめんね

おむこよ

おなかすいたよ

なんで?

おかあさん

わたしのためなのに

おかあさんわらうてる

しかたないよね

わたしおるいじだもん

そうだよね

すみつこいでじつとしていればなんにもされないよね？

だから

だから

いいよね？

ひとをすくえになつても

こじからみえるあのこじ

わきつてこじべりこいよね？

違つよね？

わたしが好きつていつたからあのこじが殺されたの？

わたしは悪魔じやないよね？

ち、ちがつもん！

こじめんなわこ

もう好きって言わないから

ただいま

あれ？

どうしたのお母さん？

え？

ガス臭いのは何？

え？ なに言つてるの？

え？ それって・・・

ちょっと待つて！

え？ 何が悪かったの？

私がまた人を好きになつたから？

ごめんなさい、だから・・・だから・・・

ここにいるのはニュースレポーター。

後ろには凄い燃えさかるアパート

「見て下さい！この燃えさかるアパートを…なぜこのようなこと

が起きたのか、現在警察が捜査中です」

テレビの前ではごろ寝をしながら見てている少年1人。

「・・・」

結局、少年は真相を知ったのかどうかはわからない。ただテレビを

眺めていたことしかわからない。

プロローグ（後書き）

・・・一応これメモですから！
読まない方が良いかもしません。
かなり適当な希ガス。
核心にはあんまり触れないようにしたのですが・・・

一話目（前書き）

・・・趣味詰め込んで暴走しただけなんで、大目に見てください。
かなり、普通・・・?にしたつもりです。

・・・なんだ?」この状況。

俺はふつーの中三男子で少子化に貢献する一人っ子。
そしてお袋と親父は旅行に行つて

「俺ん家、今日誰もいないんだ」

状態。幼なじみもいればフラグの立てよつもあるが、
幼なじみはおろか友達すら居ない。

たまたま居ないだけ。

かなりの番長、とか、女子とは全く関わらない、とかじゃなくて。
普通に運が悪かつただけ。だと思つ。
それ以外に理由はないから。

その女子に全く縁の無かつた俺が、

どうして、金髪ロリツ娘にヤンデレ行為されなきゃならんのだ。

・・・朝起きたら、手錠掛けられて抱き枕化つて。

俺のいろいろが危ないんですが。

無防備な体、さらつさらの金髪、あと匂いが俺の理性を・・・
うん、手錠さえなれば確実に道をはずしていただろう。
でも、手錠は気にくわない。一部の紳士には受けれるであらうが。
「おー、起きる。この手錠はずせ。」
「ううーん、むにゃむにゃ・・・」

かわいい。でも俺のせつかぐの休日を全部チャラにされてたまるか。
「おー起きるー!!」

「ひやうつ!」

とてつもない罪悪感が胸の中に広がる。
「お・・・おにこちゃん・・・ひどいひつゝ・・・ついつつ・・・

何かこれ、こここのファンに殺されやうな……
「あ、ごめん。」

なんで俺があやまらなきやならんのだ。

でも、こんな顔を見せられたら謝りやうを得ないだろ？

「うううう……いいよ。だつておにこけやんだもん。ひぐつ

だからその罪悪感の残る謝り方をやめてくれ。精神崩壊しそうだか

ら。

「あ……じゃあこの手錠をはずしてくれ。」

「それはいや

全然叶わんシンシンしてるな

「いや……そこを何とか

朝から幼女に頼み事。情けないにも程がある。

「え……じゃあわたしの『かれし』になつて、いいでしょ？

おにこちゃん

「いいけど……

「やつたー

顔いつぱいの笑顔、かわいいにも程がある。
こいつの彼氏ならいいかな。

いかんいかん。口リに墮ちるといつだつた。

ガチャツ

手錠がはずれた。

「んで、その『彼氏』つてのは何すればいいんだ？」

「えつとねー、その……」

考えてるといつるを見ると、思いつきで書ひやつたんだらつ。

「じゃあ、でーとしよつ

「うそ、ここよ。」

「じゃあ、やくやくねつ

こつしてみると、普通の口リツ娘だな。

「やくやくやぶつたら、ほつちようで『ぐさつ』だからね

前言撤回、こつて、どんな教育受けて来てんだ？完全に思わしくな

い教育だろ。

一話目（後書き）

・・・ 一回PCがダウンして、原稿再生できなくてキレかけましたが
楽しかった。それだけ。

暴走したので、中身はひどいですが・・・。

後、続く感じにしたけど、親がつるさーから一応進行状況保存した
だけ。

今日更新したいけど、もしかしたら明日、ひょっとするともうしな
い・・・。
だから、気にしないでください。

1. 1話目（前書き）

- ・・・ 起きた直後に暴走。

朝食を終え、色々済ませてから、靴を履く。

「おにーちゃん」

「お、どこ行くか決まったのか?」

「じゃあね~、ふーる!」

「プール・・・あ、いや、なんでもない!」

「どうしたの?いや?いやでもしばつてつれてくよ

「あ、それはやめて」

そして外に出た。

バス停までゆっくり歩く。

もう夏か・・・日差しが暑いを通り越して痛い。

そんな中、幼女の肌は柔らかそうで真っ白だ。
どこから取り出したのか、明らかにサイズの違う麦わら帽子をかぶ
つて顔いっぱいに笑みを浮かべる。

「たのしみだね!」

「ああ・・・そうだな」

「おにーちゃん、わらわないとしめるよ」

俺の気持ちを察したのか、そういうってくれた。

「水着・・・大丈夫なのか?」

「あるよー、これつ

そういうて取り出したのはスク水だった。

「おいおい。」

「えー?だめ?これしかなかつたの!ふー

怒った顔もかなり可愛かった。

「ふうん・・・

そんな会話をしているとバス停に着いてしまった。

「よし、乗ろうか。」

俺はあのときと同じセリフを発した。

「うん！」

バスの中は、微妙な時間とあつてかほどんど無人状態であった。丁度、隣り合つたふたつの席が空いていたのでそこへした。

「しづかだねー」

「そうだな」

それ以外特に話すこともなく、何となくほーっと廻^{ハシ}した。

「市民プール前、到着いたしました。」

着いた。

これだと子供連れに見えるな。と思いつつ券を買い、中に入った。

「自分で着替えれるよな?」

「うん」

「じゃあ出たとこで待つてるよ」

「はやくしないとじつかいっかやつよーー！」

(それ、自分で着つか? その歳で。

・・・・・

・・・・・

・・・・・

やつぱり。

「いつがなんのかは判らないが、あいつとセリフや反応が同じだ。

じゃあ・・・

いや、そんなことはない。させではない。

うん、大丈夫。それよりも着替えを済ませよ(ハ)着替えを済ませ、あいつと合流した。

「お、似合つてるじゃねえか」

「せう? へへんた~い」

「褒めてもらつてんだから素直に受けとつとけ」

「じゃあ、ありがとーーー！」

「ああ」

(大丈夫だ、こいつは素直だ)

「はいりつー！」

やはり時間が時間なのでほとんど貸し切り状態だった。

「およびー！」

「ああ、そこににするか？」

準備運動を済ませ、ゆっくりと入る。

一方あいつは、思いっきり飛び込みした。

「・・・ふはあ、ねえねえみて！くろーるできるんだよーーー！」

「おお、えらいなー！」

「もつとほめて！」

「えーと、優雅で大胆かつ纖細な泳ぎお見事です」

どうだ、俺の知ってる限りの褒め言葉だ

「わかんなーい」

一瞬で粉碎。

「・・・」

「でも、ありがとっ」

「どーいたしまして」

冷たい返事とは裏腹に、俺の顔、赤くなつてんだろうな・・・。

11話四（後書き）

いかん。昨日から引き継いだんだが、どう繋げるか判らんくなつた。
不自然なつなぎは勘弁してください。
ついでに、

どうしてひなつた！！！

この先どうしようか・・・
方向性見失いました。orz

二) 話題（前書き）

遅れています（>人<）
一応方向修正したつもり・・・。

プールから出た後、一応外に出た。

「ここからどこに行く？」

「むりえんぢー！」

まあよくあるリクエストなのだが・・・

「混んでるけど良いのか？」

「うん！」

絶対こいつ文句言つタイプだな。

そしてバスに乗り込んだ。

ちょっと混んでるぐらいの時間帯である。

遊園地に着く頃にはどんなに混んでるんだひつ?などと考へていたら着いてしまった。

「うわ～やっぱ混んでるな～」

「はやくい～よ」

「ああ、行こ～か」

すたすたすた。

あいつは顔中に笑みを浮かべたまま変わらない。なら、と思ふ。

たまたま通った女人を見るふりをしてみた。

「おとなのじよせいがすきなの？」

・・・顔は全く変わらないが、目の色や声の調子はすっかり変わつてゐる、怖つ。

「いやいや、そんなんじやないって」

「ふうん」

何かリュックに手、伸ばしかけてたけどそれって・・・ってかそんなもの持ち歩くなよ。

少しからかつてみたけど、あいつと変わらない。

でもこいつは、あいつみたいに悲しげな顔はしなかった。

だからかな、俺……。

いやいやいや、絶対そんなこと無いって。と自分で言い聞かせる。

あれ？

あいつが消えてる。

少し目を離した隙にどつかいつちましたのか？

こんな人混みの中だから見つけるか判らないぞ……！

「とりあえず迷子センターに……」

そこまで言つて気がついた、俺、あいつの名前聞いてない。

「おーい！おーい！」

とりあえず呼んでみる。

「おーい！おーい！、おーい！おーい！……！」

「おーい！」

やけに高いやまびこが聞こえる。

よし、そこか。

俺は人混みをかき分けてそこに向かった。

そこには、半泣きのあいつが居た。ちょっと可愛かった。

「ごめんな。もう大丈夫だから」

「もう少しうまいしたじやんか……」

「ごめんな」

そういうて抱きついた。

夏だから少し暑かったが、あいつの体は少しひんやりしていた。

こうしていると、あいつも1人の女の子だ。朝のことがなかつたかのように思えていた。

「もう……にどとはなれないで」

「ああ、誓つてやる」

「じゃあ、」

かちやり。

「ごじとはなれなじようにしてあげたよ」

今日一度田の前言撤回。あいつ、なんで朝の手錠もつて来てんだ！

?置いてこさせたはずだろ！?
予想上回りすぎだから。

二回目（後書き）

・・・失敗かな？

修正点が判らないので教えてください m(—_—) m

ちなみに遅れた言い訳をすると

昨日親に禁止食らつてて・・・。

中学生は辛いです。orz

勉強もこっちも頑張ります！！！

四話四（前書き）

回線ぶつ壊れて今までで一回しか繋がらなかつた。遅れてしません。

あと、間空いたからキャラ変わってるかも。。。

手錠付きだと、周囲の目が痛い。
だって……逆に見られるじゃん?
どーしても、

【少年、遊園地で幼女誘拐】

つつー一面の見出しが頭に浮かぶんだが。

でもこいつを喜ばせなきゃ。『彼氏』だから。
それに、こいつの笑顔が見られるなら『彼氏』つても悪くはない
し、や。

「ねえねえ、おなかすいたー」

「そうだな。」

言われてみれば今は一時、お腹がすくのも当然だな。
そのとき、クレープ屋が目に入ったので、
「クレープでも食つか?」

「うん!」

また顔いっぱいに笑みを浮かべていった。

「どれにする?」

「じゃあねー、チョコーー。」

「おお、いいだ。」

「やつたー」

・・・右手が繫がれてるから財布が出しへいんだが。
しかも見せないよう隠すのに一苦労だぞ、これ。

「どうぞ」

見えてないよな?

「わーい!」

ちくしょー、あいつ、左手繫ぎやがって。右手空くじやねえか。
とは思いつつ、たまたま空いていたベンチに座り、

「どうだ？」

と聞くと

「おこし〜」

小さな口こじぱぱこにクレープをほおばつて、

小さな手で右手をぎゅっと握つて返してくれた。

「ああ、おいしそうだな」

「ありがとね」

やつぱこいつの笑顔は可愛い。

「でも、いつしょにたべたかつたな。」

「なんで？」

「『あ～ん』つてしたかつたな～バカツブルじやあるまいし。」

「俺とでいいのか？」

「きみじやないといぢー・・・」

ちよつと照れた。

「や、それ本氣で言つてんのか？」

「どうかな～？」

そんなことを言われても俺の頬は変わらず真っ赤だ。

「か、からかうなー」

「これのりたい」

こいつが指したのはメリーゴーランドだった

「話をそらすな！」

「え？ふえ、ふえ・・・」

言葉の勢いにびびつて泣き顔だ。不謹慎ながらもまた可愛いと思つてしまつた。

「ぐすり、ぐすり、いいよ・・・。だつてきみがだつこいつしてくれてんだもん・・・。」

そういうつて抱きしめた。

「ぐすり、ぐすり、いいよ・・・。だつてきみがだつこいつしてくれてんだもん・・・。」

「そうか、『ごめんな』」

ホントに可憐こやつだな。

四話目（後書き）

あれ？間空いたから主人公変わってるかも・・・。
テストの点数悪かつたからもつと暴走したかつたんだけどな
遊園地長いな。もつと行かせたいとこあるんだけどね。

四組目（複数形）

やまと。。
展開する。。。?

まあ俺はメリーゴーランドの列に並んでいるわけだが。
手錠がかなり邪魔だ。

隣の人にはレズともかなりやばい。

つーかこんなシチュエーションあるか？無いよな！？

つてことで、乗ることになったのだが・・・

「席、どうする？」

このセリフ、シチュエーション違えばいいのに・・・。

「ここ！」

よりによつて一番外側の席かよ。

「ああ、いいぞ」

一応その隣に座る。

でもさ、これつて後ろからはバレバレだよな。
一応手を繋いでいるふりをする。

「こいびとどうしみたいじゃない？ねえ？」

「まあ、一応カップルみたいなのだからな」

「きやははは～！でも、こいびといじょうになりたいな～」
すまん、童貞には結婚以外しか・・・、それで良いのか？

「あいじんだよ～」

それつてダイジョブですかー！？

まあ、どちらにせよ口リコン扱いを受けるのだが。
メリーゴーランドが回り始める。

ゆつくり、ゆつくりと。

また、あいつが笑つてくれないかと外側を見る。
人、人、人。

休日だからかなり混雑している。

「あれ？」

少し見えた。

あいつがこっそり人陰に隠れてるところを。
前みたいに陰からこっちは見てる見たいに。

「どーしたの？」

それは絶対にない光景だ。

「おいおいおい、メリー「ゴーランドで包丁は洒落になんないって」

「また・・・きみがほかのとこみてたから」

「やめて。頼むから」

あいつは確かに普通の女子だつた。

少し悲しそうな顔でいつも居ただけだ。

俺の隣で、俺が見てるときだけいつも無理に笑つていた。

それが・・・健気にみえた。

そして同情ではなく本氣で可愛いと思えた。

こいつとは別の意味で。

俺がそんなこと思つたから・・・

「ねえねえ、なにかんがえてんの?すっ、」わいかおしてるよ。

「あ、ああ。ちょっとお腹が痛くてな」

「といれ、いく?」

丁度、回り終わつたらしい。

「まだ行かなくていいよ」

ピーンポーンパーンポーン

「もうすぐ五時、閉園の時間です」

「そろそろ帰ろっか」

「まだ! おかいものいきたい!」

すまん、いま、金欠なんだわ。

「ちがう、いっしょにきてほしいの……」

「お、お前大丈夫なのか?」

「えへへ~」

してやつたり。みたいな笑みを顔いつぱいに受けげる。
これもこれで可愛いな。

あれ？

オチ忘れた。

やばい。

どうしよう？

がんばります。

六話目（前書き）

だんだん質落ちてるな・・・orz
ガンバります

「え～ショッピングモール前」
疲れ気味の運転手の声がバスの中に響く。

「こりだつたな」

もう来たくない場所だった。

こんな場所・・・

「そう、こり」

いつになく真剣な顔だった。

「こりにこりとな顔は似合わない。

このセリフをいつのも一回囁だつたな。
もう大体分かってきた。あいつの考えてる事が。
だからこりや、

気付かないふりだ。

「もたもたしてるとどうか行つちやうや～！」
「ああん、もう…またじょううつけよつか？」
あんな顔、もうあいつにさせたくないかった。こりにもだ。
「絶対に離れないんだからね」

「よし、行こり」

ずんずん中に入つていぐ。

「ところでお前、どこ行くんだ？」

「こりもふくづば

普通にガキだな。

「ふーん」

「あ、あと、ひやつかこーなー」

「ふーん」

「ねえ、聞いてる?」

「いやいやいや、いんな」とドキレんなつて
「わみがなにかんがえてるかきになるな~?」

のぞき込むな、その目で。

「いやあしんじるね

毎回バッグに手を伸ばす

毎回ハ、外は主を伺はうな
そをもて鋸刃法蓮反てハかられる
つてか百斜口リサリで阿彌うんぢあう?

「子供服売り場つて、ここか」

さすがに、六時を回つてゐ

いつの間にそんな量の服持つてきた？

つてか一応今日初めて会った女子だぞ。着替えなんか…

いかん、ロリコンになつたか

でもいきたいんでしょ？」

「そ、そんなんじゃないって！」

じや、ひい、がさがさがさ

そういうえばさ、行くところは同じでも、やる

なんか全く違うな。

・・・行くと、か。

量徳同に、急得、か失せ得る。日、急得が失か得る。ひ

かなり人形みたいな服を着てきた。

「みて！」

かなり人形みたいな服を着てきた。

「ど」「に」あつたんだ？そんなんの

「あそこ」。

指さしたのは紳士服・・・を越えて「スパルバーーー？」そんなんあつたんだ。

「遠つ」

「にあつてゐる？」

すつ「」く似合つてゐ。【スパ】のくせに。

「似合つてゐ、と思つ」

「もつとこつて！」

「ああ、食べちやこたいぐひに可愛い」

「・・・けだもの」

ええ？期待に応えただけだからー結構いこといついたよね？すみません、間違えました。

「・・・でもきみならたべられててもいいかな」

何かぼそぼそつときこえたが、はつきりとは聞き取れなかつた。その後、何回か着替えたが、そのたび俺は頬を染める羽田になつた。そして一番可愛かつた服を持つてレジに並ぶと、

「俺が買つよ」

「金欠じやないの？」

「一応、これぐらこなら・・・」

「ほんとにー？」

「」ーゆーの着て、また「」ーでも何でもつけつけつな

「うんー」

俺たちは会計を済ませ、歩き出した。

「つぎは・・・つと」

「ひやつか」ーなーはいこや

「なんで？」

「とつてもいいものかつてもひつむやつたから

とても喜んでもらえたよつだ。よかつた。

「そのかわりに・・・」

『屋上』

ハモつた。もう分かつていた。

その目的は分からぬが、そこに行けばはつかりするだろ？

「もう、わかつてゐるの？」

「全然分かんないよ。でも、前にもこいつのことあつたから」

屋上には何もない。人が行けるようになつてゐるが、本当に何にもないのだ。

そこへ行くまでに、俺は思い出していた。この前の、悲劇を。

六話目（後書き）

思い出編突入！

かといって一話ですが。

ここまで読まれた方は分かってると思いますがあと一話です。
もうそれ以上続きません！

かといつていつ更新するか分かったもんじゃないんですけど・・・。

あ、二人の名前、どうしよう？

■ 話題（前書き）

・・・期待しないで下せ。ひとつもなく下手ですから。
しかも何も狙わずに来て悲惨。
どうしよ？後これ入れて二つだよー！？
次回作考えなきゃ・・・

少し長くなりました。

9/2 名前、一貫しました。

「おつはよー!」

「ふあー、朝から元気だな。」

俺は黒藤謙太 そしてこいつは幼なじみの春風麗。

とにかく何もかも普通な一人。唯一変なのは、麗が俺のこと愛しきでいる。つてことだ。

まあ、凛はかなり可愛い方なので嬉しいのだが・・・

「また昨日も寝なかつたの?」期待しそうにぎてしてくれて嬉しいけど、君の体はわたしのものなんだからね

もう限界突端なくらい俺を愛してくれているのだ

「頼むから町中で言つのはやめてくれ、俺が恥ずかしい。」

「私なら君と居れればどんな田で見られても嬉しいな」

「俺の迷惑は!?」

「君が恥ずかしいならやめとくけど・・・」
いつもこんな感じだ。

「んで、どこ行きたいんだ?」

今日は、一応デートの約束をしている。

と、行つても昨日、思いつきで言われたような流れだが。

「君とならどこでもいいよ」

「いや、今日はお前の好きにして良いぞ」

「じゃあね、プール!」

「うん、いいんじゃないか?」

「そう? やつた」

元気な奴だな。

そろそろ夏だな・・・蝉が鳴き始めてる。

日差しが強く、かなり暑い。プールは正直ありがたかつた。

麗はがさごそとカバンをあさり、真新しい麦わら帽子を取り出し、

かぶつた。

「似合つ？」

「ああ、可愛いぞ」

「やつた」

何度も聞いたか分からぬセリフで毎回とても喜んでくれる。
やつぱかわいいな、こいつ。

あ、そういえば。

「水着・・・大丈夫なのか？」

俺は一応家に取りに帰つた。あいつ、付いてこなかつたつけ？

「これつ！」

そういうつて取り出したのはスク水だつた。

「・・・おいおい」

「え、だめ？」

ちょっとしょぼくれた顔で行つた。こいつはどんな顔をせても可愛いな。

「あ、いや、意外と似合つかもな。」

「そう？」

転身早いな、おい。

そんな会話をするとバス停に着いてしまつた。

「よし、乗ろうつか。」

「うん！」

バスの中は、微妙な時間とあつてか運転手以外無人の状態であつた。丁度、隣り合つたふたつの席が空いていたのでそこにした。

「二人つきりだね」

「・・・運転手さんに聞こえるからやめろ」

それ以外特に話すこともなく、何となくぼーっと過ごした。

「市民プール前、到着いたしました。」

着いた。

「ふんふんふん」

なんだかよく分からぬ歌を鼻歌で歌いながら中に向かつていく。

「んじゃ、ここで分かれるから」

「うん……でも、」

「なに?」

「早く来てね」

「こりしてみるとバカップルに見えなくもないな。
そう考へてると

「早くしないとどこかへ行っちゃうよ~」
行くわけ無いのに。とか思いながら着替えを済ませ、あいつと会流
した。

「お、似合つてるじゃねえか」

「う、うん。」

何か寂しそうだ。

「どうしたんだ?」

「なんでもないよ。それよりも、泳ごう!」

準備運動を済ませ、麗が真っ先に泳いだ。
ばちやばちやばちや

「・・・ふはあ、どう?結構練習したんだよ?」

「でもうまいとは言えないが、体育で一番下の評価をとっている麗
にとつてはうまかった。

「かなり頑張ったんだな。はい、『褒美』

といつて後ろから抱きついて頬にキスをしてやつた。

「え?あ、あああああ・・・」

こいつこんなのがけど結構純粹な奴なのだ。

まあ気配りもちゃんと出来て、それなりには大人なんだろうが。

「ありがと」

ちょっとからかってやつただけだが、顔が赤い。

人の少ない時間帯だから出来ることだ。

「ははは。」

もしかして、俺も顔赤くなつてる?

「「」からどこ行く？」

俺たちはプールから出た後、バスに乗り込んだ。

「じゃあね、遊園地」

「よし、ちょうど次の停留所だな。」

「そういうて、バスのボタンを押した。

「うわ～やつぱ混んでるな～」

「まあいいじゃん」

「ああ、行こう」

すたすたすた。

あいつはいつの間にか笑っている。

なら、と思い。

たまたま通った女人を見るふりをしてみた。

「君がそんな人がタイプだとは・・・」

・・・顔は全く変わらないが、田の色や声の調子はすっごく変わってる、怖つ。

「いやいや、そんなんじゃないって」

「ふうん」

何かリュックに手、伸ばしかけてたけどそれって・・・、ってかそんなもの持ち歩くなよ。

「どこ行く？」

「じゃあね・・・メリー、ゴーランド」

「おひ、いいぞ」

ふと、プールのときの暗い表情が気になり、そちらを見た。
少しくらい顔。

「おい、どうしたんだ？」

「あつ、いやつ、ううん。何でもない

「んじや、いいや」

あいつが隠したいことなら気にしないでおひへ。

案外メリーゴーランドは混んでいた。

なので仕方なく麗の右前に座る形になつた。

メリー「――」ランドが回り始める。
ぐ～る、ぐ～る。

あいつの顔を見ようと後ろ側を見る。
少し思い詰めたような顔・・・。
やつぱなにか引っかかる。

ゆるゆるゆる。

どんどん遅くなつて、止まつた。

「さつき・・・」

「あ！お腹すいたな、私

何か話そらされた。

「じゃあクレープでも食つか」

「うん！」

そういうして、あいつはとても強く手を握りしめた。

クレープを買つとさも、受け取るとさもあいつは手を離さうとした
かった。

なんかあつたか？まあ、あいつのことだから大丈夫だらう。

「はい、あ～ん」

俺は右手がふさがつていて、じつしてあいつに食べさせてもらひ^羽
目になつた。

「あ～ん、うぐう。――ふふえふおふいふふいふふえふおふいふふい
(詰め込みすぎ詰め込みすぎ)」

「あ、ごめん」

「かよ・・・」

ちゅつと元氣吸い取られてる氣が・・・

「んじや、今度はど―行く？」

「最後くらい、君が決めて」

「・・・」

軽くトラウマなんだぞ、おい。

「じゃあショッピングモールで何か見てくか？」

うん!

とても嬉しそうに笑う。やつぱりいつはこんな顔が似合つよ。
しばらく話してると・・・

「え、ショッピングモール前？」

疲れ気味の運転手の声がバスの中に響く。

お疲れ様、運転手さん。と心中でいいながら料金を入れ、入口に向かって歩く。

「ちょっと待つて……」

何にもないのに呼び止められた。

「樂府」二十一

「絶対だよ、ほんとに絶対だからね」

何でこんなにムキになるんだろ？

おは 純文た

あやつにまつぱあらわ

「どうでお前、どこ行くんだ？」

「え、えと・・・服！服見に行こつ」

ここで何かあつたのか？何かおかしいぞ、こいつ。

服の一トナーに着くと

ここで待ってて！」

あれ？離れるなって言つてなかつたつけ？

たつたつたつたつたつ・・・

何着か持ってきてきた。

「この間、そんな量の服持つてきただ?

「いや、ちー、心斎から中学生だぞ！？」

まだ早いだろ！

「じゃあ来ちゃいなよ」

「・・・」

「じゃあ着替えてくるね」

「じゃりり、がさがさがさ

「じり?似合ひ?」

「ああ、あ・・・」

思考停止。

「何でそんな服着てんの?」

「だつて~可愛かったも~ん」

といいながら頬を膨らませる。

「いや・・・だからってコスプレはないだろ」

しかもその年で頬を膨らませるな、ぶりつ娘か

「でもさ、似合つてると思つんだ~」

「あ、ああ、確かに可愛いな」

「ふふん」

得意げな顔で言った。よし、ちょっとからかつか。

「ほんとに食べちゃいたいぐらい可愛いな」

「え、え? そそそ、それって・・・じりじりの意味かな?」

「え? 可愛いって事だよ」

「いや、君に食べられるんなら・・・」

残念そうに呟いていたがよく聞こえなかつた。
こいつの焦つた顔、可愛いな。

「綺麗だね~」

「ホントだな。」

「ううん、ちょっと夜景が見たいな~」

「いいぞ。」

そういうつて向かったのは屋上。

「あ、次、レストランでも行く?」

「ううん、ちょっと夜景が見たいな~」

「いいぞ。」

「綺麗だね~」

「ホントだな。」

「これで、もう、思い残したことないね。」

「え? 今なんて言った?」

「えへへ、もう、思い残したことはない。つていつたの。」
と、笑つて答える。

「水着も見てもらつたし、遊園地にも行つたし、一緒に夜景も見れたし。もうやり残したことはないの」

「え？ 余計意味が分かんないんだが・・・」

と、いうとちよつと怒つたようなそぶりで、

「鈍感すぎるよ、じつかのラブコメの主人公じやあるまいし。」
「ま、まさかお前・・・」

「そうだよ。」

「引っ越しか？」

「・・・ちょっと違うね、こんな雰囲気壊すのいやだから言ひナビ、

「なんだ？」

「私、死のうと思つんだけビ」

「・・・嘘だろ。」

たつたつたつた。

「ほんとだよー！」から飛び降りようとしてるんだよー。」
大声で言つた。

「なんで？ お前は死にたいなんて事はないだろー。」

そういう奴だ。こいつは。

「嘘つき・・・私のこと、全然知らないくせに。」

さつきとはうつてかわつて弱々しい声で言つた。

「知つてる、俺が出来ることは全部。」

「嘘だよ・・・私、ずっとずっと気付いてくれるの待つてたよ
「何が？」

そして、麗は言つた。

「きみと・・・」

俺はそれに続く言葉を待つていた。

「君と離れたくないのーー瞬でもーー。」

大声で叫んだ。それもさつきよりも。

「じゃあ・・・余計死にたくないんじゃないのか？」

「じゃあ！ 君はいつでも一緒にいてくれる？ 私を寂しがらせない
ようにしてくれる？ 私のためにいつでもそばにいてくれる？ どこに
も行かないで私の視界の中にいてくれる？ 私が追いつくために足を
止めて待つてくれる？ 私の気まぐれに振り回されてくれる？ 私以
外の女人を愛さないでいてくれる？ 私以外の人を側に寄せ付けな
いでくれる？ 私以外の女人を見ないでくれる？」

「ああ。全部、そのヤンデレを俺は受け入れる覚悟がある」
「そんなんじゃない！」

違う！ とだだつ子のよつた声で言った。

「何が違うんだ？ 俺は・・・」

「君にそんな迷惑掛けられない。」

「ぜ、全然迷惑じゃないよ」

「それも嘘、本当は迷惑なはず、知ってるもん。」

「・・・」

迷惑なんかじゃない、と大声で言いたかった。
でも、でも・・・

「じゃね。」

「待つてくれ！」

「何？ 一言だけ聞いてあげる」

「お前が大好きだ！」

そういうとあいつは「うう」と言った

「ふふ・・・そんなもんかあ・・・」

といつて悲しげな表情をした。

「ああ、じゃね。」

そして・・・

もう、これないかもしませんが、来れれば更新しようと思こます。
すみません。

一応、後一話あります
出来ないかもしません。

7 / 17

少し更新しました！

豊田に帰ってもやりましたよ！！！

ほんとお父様怖ズ・・・

7/19 で終わりです！

・・・はい、長い上になんかひどいです。

しかも最後の主人公テンプレ以下・・・しかもバッドエンド選択。
最悪だ・・・。

あ、凛さんは別に、生きてる！みたいな展開に使うんじやなくて、死んだ的なことを書きたくなかつただけです。書きたくないんですよ～愛着わいちゃつて・・・。

遅れですみません

よしー俺、完結するー

・・・勘違いされたるな、こんなの。
やつと完結だ。

・・・シリアルなどひらがな表記だとさめるな
少し長くなりました。

しかもキャラ変わりました。

「ここに来て何がしたいんだ?」

「・・・」

さつきから急に黙り込んでいる。そして、

「じゃあね。」

と悲しそうに叫びて走り出した。

「おこ! わよつと待て!」

あわてて走り出すが間に合ひそうもない。

ダンッ

あいつの体が宙に浮いた・・・。

「おこ!!!」

俺は身を乗り出した。そして、手をのばした。

届け、早く届け。落ちるな、俺に話してからにしてくれ。

あのとき何があつたのか俺にはまだ分からぬ。

あいつが何を悩んでいたのか、永遠に知らないなんて悲しすぎる。

何かロープでもないか、これでも使えるか?

もう向でもいい、やけくそだ!

がちゃん。

気の抜けた音が聞こえ、あいつの手首に手錠が、もつ矢方にロープが掛けられている。

「よっこしょっと

なんて言いながら、引き上げる。

「よかつたな、手錠が役に立つたぞ。」

あえて空氣の読まない発言をする。「こんな空氣はあいつには辛いだろ。」

「なんで・・・なんでしなせてくれなかつたの！？」

「いや・・・姉妹で俺の目の前で死なれたら色々あるじゃ・・・。」

「なんでしまってわかつたの？」

「いや、あのときの「データベース」話したの家族だけだし、持つてた

物も近かつたし」

「え、でもそれじゃあきみは・・・」

「でも、その反応が一番のヒントかな。」

・・・

沈黙がかなり流れれる。

それを破つたのは俺だった。

「なあ、あいつのこと、全部俺に話してくれないか。」

「いいよ」

実はね、私たちのお父さん、私たちを捨ててどうか行

つっちゃつたの。

不倫してて、お母さんと喧嘩したからそのまま帰つてになかった。

それでね、お母さん變成になつちゃつて。

いつも何かあると私たちを虐めるの。せじせじせじつて。椅子で殴られたときもあったよ。

でもね、私たちを愛してるのであります。

お母さん怒つたら殴つて殴つて殴られた後、いつも私たちを抱いて謝るの。

「ごめんなさい、もうこんなことしないからって。

そんなんだから、もう何が愛なのか分からなくなつたよ。

それでね、だんだんお母さん、私たちに手加減しないようになつたの。

だから私たち、一回家出したらい、すぐ捕まつたの、一皿で。

その時、もう私たちを離さないつて言つて、お母さん私たちに手錠を掛けたんだよ！？

それでお姉ちゃん、もう嫌つて、家に火を付けて

「ごめんな。

「それは・・・それはお姉ちゃんに言つてよー何ー？ 全部受け入れる覚悟がある？ 違う！ お姉ちゃんはその自分の中の病気とお母さんの病気を否定して欲しかつたんだよー？」

「・・・ごめんな。

「でも、一つだけ、君に感謝することがある。」

そんなことない。あいつに何にもしてやれなかつたつて事は自分が一番よく分かつてる。

「お姉ちゃんに大好きつていつた」と

「なんだ？」

「お姉ちゃん・・・それを一番言つて欲しかつたからね」

「何でそんなのが分かるんだ？」

「まあね」

何か意味深な笑みを浮かべて、

「じゃあね」

とビビリかへ去つていった……。

あの日から一週間。相変わらずあいつは意味が分からぬ。と、言つと。

確かあいつはあの火事に巻き込まれて、大やけどで未だ病院に入院中のはずだし、たとえ抜け出しても、跡が絶対残つているはずだ。

その上、家もないのにビビリへ帰るところのだ?

ああ、全つ然分からぬ。
もしかして……幽霊?

「ふせいか~い!

・・・何でお前がここにいるんだ!

「何で俺の部屋の、ベッドの下にいるんだよー」

「いや、なんかちょっとね。」

その「」まかし方、誰から教わった?

「しーかーも! 一番の危険区域だし! ! !」

男子の。

「あのね、私とお姉ちゃんがいつも一緒にやなこと思つた?」

・・・こいつが言いたいのはつまり、いつも一緒にいたと。ずっと俺らを見てたと。

俺のセリフ、全部聞かれていたと。

・・・。

はいはい、分かりましたよ。

「でね、でね~。うちの親から逃げ出してきた。」

・・・つまりかくまえと。

「じゃあ、家で暮らすか?」

「うん!」

頑張れ、
俺。

六話目（後書き）

・・・ラストの方かなり適当です。
何か別の連載が始まりそうですねw
やりたくないんですけど。

ちなみに、零話目以外は30分、
零話目は三時間、
これはなんと五時間（全て合計）
大して練ってないけどちょいちょい作っているので、こんなにおっ
そくなりました。
言い訳ですけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2135m/>

・・・調子に乗って暴走したから見ないで！

2011年10月7日11時11分発行